一筆啓上 作左通信

第十四号　平成十四年十月二十八日（月）発行

みなさん、「自然ランド」って知っていますか。これは、西部小学校の中庭にあるビオトープのことなんです。「ビオトープ」という言葉をあまり聞いたことがないかも知れませんが、これは、ドイツ語から来ています。ビオトープとは、「生命」を表す接頭語のｂｉｏと「場所」を意味するｔｏｐを合成した言葉です。すなわち、「草・虫・動物・人間などが共に生きていく空間」という意味に使われています。

では、なぜ西部小がつくることになったのか。それは開発により、六ッ美の自然が年々減少している点にあります。かつて、小川には、メダカやドジョウなどの水生動物、原っぱなどには、モンシロチョウやアゲハ、カブトムシなどの昆虫がいたるところにいました。ところが、今、あまり見かけなくなっているのです。そのため、子どもたちが、昆虫採集や魚つかみをする体験が少なく、自然とのふれあいやかかわりが不足している点にあります。

昨年から学校の中庭を改良し、卒業した六年生が、池や散歩道を整備し、基礎をつくってくれました。池には、メダカやタナゴなどが入っています。

そして、今年、「夢いっぱいふれあいいっぱいの自然ランド」をつくろうと、子どもたちのアイデアをもとに「昆虫エリア」をつくることになりました。この活動に、お父さん方も協力することになり、「おやじの会」が発足しました。毎週土曜日、昆虫の観察をするための「昆虫の館」づくりに協力していただいています。五月から始まった「昆虫の館」は、九月下旬には、ほぼ外観が完成しました。

子どもたちに、六ッ美の自然を再現し、自然ランドとかかわらせることから「なぜ」「どうして」という「ふしぎ」を大切に、「科学する心」を育てていきたいと思っています。また、この「自然ランド」が、作左の里に住む人たちの憩いの場になるようにもしたいと思っています。自然ランドの完成は、来年の予定です。

―自然ランドにある「昆虫の館」―